

ジュラシック・トーク ラトルの20世紀音楽案内



「故郷を離れて」というイギリスで制作されたテレビ番組が、先日BSで放送されましたね。サイモン・ラトルが、手兵バーミンガム市交響楽団を指揮しながら20世紀の音楽について語るというもので、近頃はちょっと見られない充実した内容でした。番組のタイトルにある「故郷」とは、それまでの音楽が安住していた環境、すなわち19世紀までの作曲の様式

(和声、形式、リズムなど)を指しているようです。20世紀に入って、クラシック音楽はあらゆる面で大きな変貌をとげたわけですが、この番組では7回にわたってそれぞれのテーマのもとに、ラトルが分かりやすく検証を行っています。まず、それぞれの回のサブタイトルと曲目をご紹介しますみましょう。

1 自由と混迷の中から

ワーグナー／「トリスタンとイゾルデ」
前奏曲

シェーンベルク／清められた夜

マーラー／交響曲第7番

R・シュトラウス／エレクトラ

シェーンベルク／5つの小品

ウェーベルン／5つの小品

ベルク／Vn協奏曲

2 躍動するリズム

ストラヴィンスキー／春の祭典

ヴァレーズ／イオニゼーション

ベートーヴェン／「第9」第2楽章

マーラー／大地の歌

リゲティ／アトモスフェール

ライヒ／木片のための音楽

ナンカーロー／ピアノロール#21

ブーレーズ／リチュエル

メシアン／トゥランガリラ交響曲

3 ゆらめく色彩

ドビュッシー／牧神の午後への前奏曲

ストラヴィンスキー／火の鳥

ラヴェル／ダフニスとクロエ

ドビュッシー／遊戯

シェーンベルク／5つの小品

ブーレーズ／ノタシオン

メシアン／われら死者の復活を待ち望む

武満／夢窓

4 抑圧と受難

バルトーク／管弦楽のための協奏曲

青ひげ公の城

弦・打楽器・チェレスタのための音楽

中国の不思議な役人

ショスタコーヴィチ／交響曲第4番

交響曲第5番

交響曲第14番

ルトスワフスキ／管弦楽のための協奏曲

ベネチアの遊び

交響曲第3番

5 アメリカの響き

ガーシュウィン／ラブソディー・イン・ブルー

アイブズ／戦没将兵記念日

カーター／約100×150の音符の祭典

コーブランド／アパラチアの春

ワイル／ストリート・シーン

バーンスタイン／シンフォニック・ダンス

ケージ／コンストラクション・イン・メタル#1

フェルドマン／マダム・プレスは先週90歳で亡くなった

アダムズ／ハーモニウム

ライリー／インク

7 現代の視点

ベリオ／ラボリントゥス#2

ハンツェ／交響曲第8番

グバイドゥーリナ／ツァイトゲシュタルテン

クルターク／シュテファンスの墓

バートウィスル／リチュアル・フラグメント

タネジ／ドラウンド・アウト

ナッセン／花火と華麗な吹奏

6 回顧から創造へ

R・シュトラウス／4つの最後の歌

シェーンベルク／ワルシャワの生き残り

ブーレーズ／ル・マルトール・サン・メートル

ウェーベルン／5つの小品

シュトックハウゼン／グルッペン

ブリテン／セレナード

ストラヴィンスキー／アゴン

どうです。聴いたこともないような曲、聴こうと思っても95年のブルーーズ・フェスティバルのような特別なことでもない限り生のコンサートでは絶対に演奏されないような曲がいっぱいあって、壮観でしょう？メシアンやブルーーズの超難曲をいともたやすく演奏してしまっているのもさることながら、なによりもすごいのはギドン・クレメル（ベルクの協奏曲）やジャンヌ・ロリオ（「トゥランガリラ」のオンド・マルトノ）といった豪華なソリストを惜しげもなく使っているってことです。彼らは普段からこういう音楽の紹介には熱心で、調べてみたらちょうど今ごろ（98年3月）も“TOWARDS THE MILLENNIUM - THE 70s”というシリーズのコンサートをやっている真っ最中なのですね。おそらく、シューティング時（1996年）にもリンクしたコンサートが開催されていて、ソリストを流用することができたのでしょう。

ラトルは、この番組のことを「20世紀の音楽を総合的に紹介するのが目的ではなく、レストランで素晴らしい料理の試食をしてもらおうようなもの」と言っています。最初の出会いというのは大切なもので、味見の料理がまずければ誰も二度と同じものを食べようとはしません。しかし初めて聴く曲がこんなにいきいきと魅力にあふれていれば、きっと好きになって一生聴きつづけてしまうことでしょう。

さらに素晴らしいのが映像です。次の3つの素材が有機的に使われています。

①ラトルが指揮をするCBSO

この手の番組ではよく、視覚的な効果をねらってセットを組んだり、音だけを別に録ったりするものですが、ここで使われているのは彼らの本拠地、シンフォニー・ホール、しかも同時録音です。注目すべきは団員のコスチューム。男女ともお揃いのオーシャンブルーとモスグリーンの綿シャツ（!）なのですが、2色が不規則に並んでいるのもとっても素敵なおセンスです。

②ドキュメンタリー・フィルム

白黒サイレントも含め、貴重な資料がふんだんに使われています。私はこの番組で初めて「動いている」ルトスワフスキを見ることができましたし、ブルーーズを吹いている若き日のオーレル・ニコシなどという、超レアな映像にもお目にかかれます。

③BGV

バックに流れる映像もとてもクオリティの高いものです。たとえば「春の祭典」の高度な画像処理など、ポップスの世界で数々の名作ビデオ・クリップを生んでいる国の底力を感じずにはいられません。この境地から最も遠いところにあるのが、オリンピック開会式での「第9」の振り付けだと申し上げれば、その素晴らしさがお分かりいただけるのではないのでしょうか。

というわけで、コンセプト、演奏、映像と、どれをとっても非のうちどころの無い素晴らしい番組ですから、ぜひ多くの人に見てもらいたいものですが、最近のような元気のないLD市場では、すんなりとLD化されるとは思えません。半年ぐらい先の再ON AIRをひたすら待つことにしましょう。

ところで、すでにご存知でしょうが、ラトル自身は今年の夏で18年つとめたCBSOの首席指揮者を辞めてしまいます（後任は Sakari Oramo というフィンランドの指揮者）。このオケとの関係はこれからも継続していくということですが、このようなぜいたくなプロジェクトはもはや望めないのかと思うと、ちょっと残念ですね。



収録が行われたシンフォニー・ホール